

北軽井沢の春の林で、モミジの枝にしばし羽を休めるシジュウカラのオスです。まだ芽吹ききらない枝先にとまるその姿は、冬を越え、繁殖期のただ中にある小鳥らしい緊張感と、どこかくたびれた季節感の両方を感じさせます。

シジュウカラは日本でもっとも身近なカラ類の一つで、都会から山の中までどこでも見かけます。ヤマガラやコガラ、ヒガラなど他の多くのカラ類に比べると、雌雄の見分けが比較的しやすい鳥として知られています。最大のポイントは、胸から腹に伸びる黒い縦線、いわゆる「ネクタイ」です。オスはこの黒線が太く力強く、胸の黒も広く鮮明で、この写真でも白い腹を縦に貫く黒の存在感が際立っています。対してメスはこの線が細めで、全体にやや控えめです。

春から初夏にかけてのシジュウカラは、繁殖活動が最盛期を迎える一方で、羽毛は冬から使い込まれたままの時期でもあります。そのため、夏の本格的な換羽前には、頭部や胸の羽がやや擦れ、少し乱れた印象になる個体も少なくありません。この個体も、黒い頭頂部や喉元にわずかなほつれが見え、いわば「冠毛の時期」のような、少しボロっつい感じに見えます。しかしそれは衰えではなく、巣作りや縄張り防衛、さえずりに忙しい春の勲章のようなものです。むしろ完璧に整いすぎていない羽の質感が、この季節を生きる野鳥のリアルさを伝えてくれます。

北軽井沢では、こうしたシジュウカラがモミジやカラマツ、シラカバの枝を軽やかに移動しながら、昆虫や芽吹きの周囲を探ります。高原の遅い春の中で、まだ裸に近いモミジの枝にとまる姿は、新緑直前の森ならではの一場面です。白と黒の明快なコントラスト、そして少し着古した礼服のような羽衣。その姿は、身近な鳥でありながら、北軽井沢の春を静かに告げる小さな森の主演です。 (2026年5月上旬/北軽井沢)

